

# 「思い出コンペイトウ」

大分県立中津東高等学校定時制3年 中藪 実可子

兄の選ぶ駄菓子は、いつもおいしかった。

幼いころ、まだ小さかった手に小銭を握りしめて、兄と私は近所の駄菓子屋まで毎日のようにペダルをこいでいた。悩みに悩んでやっと決めた今日のおやつ。十円ガムのアタリを引くのは得意だったが、兄のように味のアタリを見つけることは、なかなかできなかった。兄の選ぶ駄菓子にハズレはなかった。

「なんでおいしいんがわかるん？ ゆうくん、すげえなあ」と私。兄は何も言わなかったが、にんまりと嬉しそうに得意顔だった。

いつしか私は、兄が手にする駄菓子をまねるようになった。その時に出会ったコンペイトウ。こんなにおいしいものがこの世にあったなんて。夢心地の私がいいた。

いつも兄の背中を追っていた私。兄に少しでも近づけるよう。母にしかられたあとのコンペイトウはいつもより甘かった。しかし、そんな私は、いつしか兄を超えたいと思うようになっていた。あこがれの存在がライバルに変わった瞬間だ。

小2の兄が勉強していた掛け算九九。幼稚園児だった私は、負けじと必死に食らいついた。お絵かき、口げんか、日常の中のちょっとした小さな競争も。何をしたらって同等、いや、私の方が勝っていると思っていた。だが、中学高校と上がるにつれ、どうしてもかなわぬものがひとつ出てきた。それが川柳だった。私も兄も夜間定時制高校へ進学した。

兄の詠む川柳は人をうならせ、時に圧倒する力をもっていた。川柳大会で最優秀になったり、学校新聞にコーナーが作られたり、私から見ても「すごい」と感動する作品ばかりだった。

定時制高校の4年間、皆勤はならずとも（1日だけ体調不良で早退）、働きながら、見事に就職試験にも合格し、現在東京で自立の道を歩んでいる兄は、「卒業までに百句！」という先生との約束も見事に有言実行した。その兄が自分で一番好きだという作品は次の一句。

さらば友 花を咲かせて また逢おう

兄を目標とする私には、この一句にこめた兄の思いが十分すぎるほどわかる。

そんな時、私にひとつのチャンスがめぐってきた。「ミカ、おまえ論説書いてみらん？」生徒会の先生に声をかけられたのだ。「何それ？ 何書くん？」私はそう答えるだけだった。しかし先生から話を聞くにつれ、私のライバル精神がどんどん高揚していったのだ。「世の中のいろんな出来事やニュースから、自分の思う考えや意見を書けばいいんよ」という先生の話は、私の胸を強くとらえたのだった。

「兄ちゃんが川柳なら、私は文章で勝負してやる！ これならできるかもしれない」  
私は書くことを誓った。

毎月発行のオール手書きの生徒会新聞。ここには毎回校長先生の手書きの一筆も載る。ここに私の論説《みかんの知恵》のコーナーができた。ちなみに「みかん」は私のあだ名です（笑）。学校新聞に私のコーナーができるなんて！ しかも「ゆう君、いや兄の川柳よりスペースでけえじゃん！」

私は思った。紙面を通じて兄と勝負ができると。何ともいえぬこの喜びに、私の胸は躍った。

私は毎月途切れることなく論説を掲載できている。この9月で連載は10回目。卒業まで書き続ければ計28回になる。兄の百句に私は負けない。五・七・五の十七音に思いを吹き込んだ兄に、私は論説で立ち向かう。

兄をまねて学んだこと。兄と勝負して学んだこと。兄という存在は、私のライバルであり、私を支える心の糧になっている。

幼いころ兄と食べた甘いコンペイトウのように、この言葉の勝負を思い出せる日が来ますように。私は今日も筆を走らせる。